

その多くがまだ飲酒のできない大学一年生の目に、酒を楽しむ場である居酒屋がどのように映っているのでしょうか。ちょっとした街の通りを歩けば居酒屋の看板はいやでも目に入ってきます。また、テレビをつけたり動画配信サイトをのぞいたりすれば、居酒屋を舞台にした番組や動画がちらほらと目につきます。おそらく私たちは、街歩きの際やメディア接触を通して、居酒屋という存在に関するなんらかのイメージを作り上げているでしょう。

本演習第二回目の今回は、受講生に、自分たちのもつ「居酒屋のイメージ」を表現している視覚的資料を持ってきてもらいました。この活動には、①自分のもつイメージを自覚すること、②そのイメージを既存の資料を用いて具体化すること、③人前で発表することが含まれています。

スナップショットやドキュメンタリー番組、『正直不動産』『花崎舞が黙ってない』『おっさんずラブ』といったテレビドラマを例に出して、一人ひとりの受講生がそれぞれの「居酒屋のイメージ」を語ってくれました。かれらが持ち寄ったイメージをぎゅっとまとめると、こんな映像が浮かんできました。

居酒屋は、どこかにポツンと一軒だけあるというよりも、駅前の、「なんとか小路」のような細い通りに軒を連ねている。小路に建ち並ぶ店の、道に突き出た看板は、遠くから眺めれば互いに重なり合って、「みち」「だの」「鳥金」だのと自分の名前を主張する。

小体な店の前で立ち止まる。表には手書きのメニューの書かれた折りたたみボードが置かれている。

夜風に揺れるのれんをくぐり、引き戸を開く。はじめての店で緊張する瞬間だ。

すると目を引いたのは、ずらりと吊り下げられた、たくさん提灯。正面の壁にはグラス片手に微笑む美女のポスター。提灯に赤く照らされた店の木造の壁にはメニューの書かれた短冊がびっしりと貼られている。短冊の列に目を走らせて、値段の確認。うん、それほど高くない。

カウンターの一角に腰をおろす。カウンターの中に立つ店主のおやじの肩越しに見える冷蔵庫には一升瓶がぎっしりと立てられている。サーバーの側面を見るに、この店はサッポロビールがただけそっだ。

一杯頼んでから、一息ついて周りを眺める。

テーブルの客は仕事帰りだろうか、大きな声で愚痴を言っている。くるくると小気味よく動き回って注文を聞いたり料理を運んだりするスタッフと客がにこやかに声を交わす。

隣に座る先客の顔が赤いのは提灯の灯りのせいか、それとも涙のせいか。「おやじ、いつもの」なんて言っているから、たぶん常連なんだろう。そのおやじは客の話につきあい、時

折うなずきながら包丁を振るっている。

壁際の小上がりでは、学生のグループがテーブルを囲んで賑やかに飲んでた。漏れ聞こえる話の内容からすると音楽系のサークルだろうか、先輩と後輩とが肩を組んで楽しそうだ。

店の居心地の良さにまかせていると、酒が進んできた。いつの間にか、カウンターとテーブルと小上がりの客が垣根を越えて飲み交わしていた。年齢の違いも平時の肩書きも関係ないひとつの社会が、ここにはできあがっていた。

右の架空のストーリーは、受講生の語る居酒屋イメージを圧縮したものでした。それは、

- ・ 駅前の繁華街にある
  - ・ 木造の小さな店で
  - ・ 短冊に書かれた酒や料理のメニューやポスターが壁に貼られる
  - ・ 小上がりやテーブル、カウンターがしつらえられており
  - ・ なにより客と客、客と店のスタッフの距離が近く、フラットな関係を持ち
  - ・ にぎやかに笑ったり、大声で愚痴ったり、ひとりで泣いたりする
- そんな場所として描くことができそうです。

居酒屋評論家として知られる太田和彦氏は、いい居酒屋の条件を「いい酒、いい人、いい肴」としています。受講生のイメージが「人」に寄っているように見えるのが非常に興味深い点です。言い換えると、「人が集う場としての居酒屋」がイメージの核となっているように感じられました。もちろん、美味しい料理やお酒があればなおよいでしょう。しかし、イメージの中の居酒屋ではそれらはもしかすると「人」に比べると大事ではないのかもしれない。こうしたイメージは本演習を通してどのように変わっていくのでしょうか。

